ロンドン便り　その 54

2015-5-8
荒川英敏

英国総選挙 2015 の結果

5 月 7 日に英国総選挙 2015 が行われました。今回の総選挙は国会下院議員 650 人、279 の地方議会の議員約 9,000 人と数ヶ所の地方都市の市長選挙でした。国政に大きな影響を与える下院議員選挙は全国の 650 の小選挙区（一人選出）で 43,000 ヶ所の投票所が準備されました。結果は選挙前の世論調査での保守党・労働党の支持率が拮抗していた状況とは違って、保守党が 331 議席の過半数を獲得し、労働党の 232 議席を 99 議席も上回りました。キャメロン党首は選挙前の自由民主党との連立政権の首相ではなく、与党保守党単独政権の首相としてダウニングストリートの首相官邸に戻って来られ、高らかに勝利宣言を行いましたてした。

エリザベス女王に謁見した直後に、首相官邸に戻って来て
勝利宣言をするキャメロン首相（BBC Web より）

	獲得議席	選挙前議席	増減議席
保守党	331	307	+24
労働党	232	258	−26
スコットランド民族党（SNP）	56	6	+50
自由民主党	8	56	−48
その他	23	23	0
合計	650	650	

選挙は午前7:00から仕事帰りの人々も投票が出来る様に、午後10:00まで行われました。BBCの特別番組[選挙2015速報]がスタートしたのが午後9:55、キャスターがおもむろに「私の手元にある封筒はBBCが行った270ヶ所の投票所で22,000人の投票者から聞いた出口調査の結果が入っています。この封筒は投票が締め切られる午後 10:00丁度に開封して皆様にお知らせいたします。」と話ました。出口調査の結果は、保守党316議席、労働党239議席、自由民主党10議席、スコットランド民族党(以下、SNP)56議席、その他政党29議席と言うものでしたが、実際の選挙結果との比較では、保守党の過半数越えを除けば、かなり近似な議席数を予測していたことには驚きました。

選挙戦が始まった3月末のBBCの世論調査では労働党が2ポイントほど保守党より支持率を上回っていましたが、選挙戦が進むにつれ保守党が追い上げ、投票直前の支持率は35%で拮抗しており成り行きが注目されました。結局、保守党が所得税減税、財政収支の黒字化や200万人の雇用創出、3、4歳児の週30時間の無料保育、若い世代向けの住宅政策、年金の増額、医療改革と具体的に判り易い言葉で政策を訴求したことが功を奏しただろうと思います。しかし何と言っても目玉は保守党が勝利した暁には2016年か2017年度に、英国のEUからの離脱を国民に問う国民投票の実施であります。

一方の労働党は財政赤字の改善、法定最低賃金の引き上げ、医療改革で医師8,000人と看護師20,000人、助産婦3,000人の雇用やがん検診のスピード化等の政策をアピールし、EU残留を是としEU改革の推進等でした。更に選挙終盤戦に入りSNPは労働党が過半数を取れないと見ると労働党との連立で政権与党を成立させると意気込んでいましたが、労働党は元々スコットランド独立反対であった為、SNPと連立を組むわけにはいかず悩ましいところでした。しかし労働党が勝利し連立政権とは言え首相官邸にスコットランドの政党が乗り込むおそれに嫌気した選挙民の約80%を占めるイングランド人の過半数が保守党へのサポートに動いた、との論調のメディアもありました。

今回の選挙で台風の目となったのは党首スタージョン女史の率いるSNPは、先のスコットランド独立を問う住民投票を扇動し結果は独立反対派に僅差で敗れたとは言え、約半数のスコットランド住民の民意を味方に付けスコットランドの59選挙区で選挙前の6議席から56議席も獲得し大躍進、保守党、労働党は共に獲得議席は僅か一議席づつで大敗し、スコットランドはSNPによって席巻されました。これでSNPの国会での発言権が強まり再びスコットランドの独立機運が高まるのではないかと独立反対派の心配は絶えません。

さて、保守党が選挙前に約束した英国のEU離脱を問う国民投票が遅くとも2017年までに行われることが現実味を帯びて来ています。しかし、キャメロン首相の本音は保守党内のEU離脱派を鎮めるジェスチャーで、国民投票を実施してもEU残留を支持する民意が過半数

占めるとの読みからEUに残留し、引き続きユーロ通貨圏には入らず自国通貨ポンドを守りながら適宜、離脱をちらつかせ、英国が有利になる様にEU側と交渉するのではないかと思われます。一方、産業界の本音は、英国の貿易額の50%はEU間との取引である現実を考えるとEU離脱は英国経済に大きな打撃を与えると離脱反対の立場を取っています。特に，ヨーロッパ最大の金融センターを抱えるロンドンシティーではワールドクラスの金融機関のロンドンからの脱出が続くと、シティーはヨーロッパのローカルな一金融街に成り下がると危惧されています。選挙戦の最中にヨーロッパ最大手の銀行でロンドンに本社を置くHSBCホールディングは英国金融庁の締め付けが強すぎるのとの理由で、本社の英国外への移転をほのめかし大きなニュースとなりました。しかしこれはHSBCの英国のEU離脱反対の意思表明とも受け取られています。

世界最初に議会制度を成立させ、上院・下院の二院制と保守党、労働党の二大政党による適宜な政権交代と自由世界の模範となっていた英国の二大政党時代もいよいよ終焉を向かえるのではないかと揶揄されていましたが、今回の選挙で保守党が過半数の議席を獲得しことは大きな意義があると思います。今後、EUとの関係やスコットランド民族独立機運の再熱の懸念や、かってない複雑な政治環境が予想される中、保守党が英国丸の操舵室を占拠した訳で、キャップテン・キャメロンが向こう5年間、英国丸をどの方向に進めて行くのか舵取りを見守りたいですね。（了）